



|              |                                                                                       |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』（1816年）について(3)：ブラジルの自由人、奴隷                                          |
| Author(s)    | 東, 明彦                                                                                 |
| Citation     | ブラジル研究. 2015, 11, p. 97-107                                                           |
| Version Type | VoR                                                                                   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/106548">https://hdl.handle.net/11094/106548</a> |
| rights       |                                                                                       |
| Note         |                                                                                       |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』

(1816 年) について(3)

## ーブラジルの自由人、奴隷ー

東 明彦

### はじめに

1809 年から 1815 年までブラジルに滞在したヘンリー・コスターが執筆した『ブラジル旅行記』(以下、原則として『旅行記』と略記)は刊行直後から好評を博し、英語版や各国語版が短時日のうちに次々と出版された。コスターの『旅行記』に対する評の中で最も知られているのは、『千夜一夜物語』の翻訳でも知られるリチャード・フランシス・バートンによる「正確なコスター」という評である。事実、コスターの『旅行記』は、その情報や記述の「正確さ」から、後に 19 世紀初頭のブラジル北東部 に関する基本書と見なされるようになった。<sup>1</sup>

本稿では、拙稿「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816 年)について(1)ー人と作品ー」(『ブラジル研究』第 8 号)、および「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816 年)について(2)ーブラジルの奴隷制社会ー」(『ブ

ラジル研究』第9号)を踏まえて、『旅行記』に特徴的な記述を検討し、コスター著『いかに奴隷制を改善するかについて』に関するダ・クニャの分析<sup>2</sup>を援用しながら、「正確なコスター」と評された『旅行記』の記述の背景について考察を加えることにする。

## 1. コスター『旅行記』に特徴的な記述

コスターは、『旅行記』の第18章「自由人」および第19章「奴隷制」において、ブラジル北東部ペルナンブーコ地方の有色人の地位や待遇について記述した。<sup>3</sup>リクシも言うように、「コスターの著書は、北東部の人々の民族誌や魂を扱った最初のもので、経済面や社会・文化面から見たペルナンブーコ地方の都市や農園における人々の暮らし、さらに自由人や奴隷の生活状況に関する貴重な情報を含み、彼らの日々の生活を理解しようとしたものであった」。<sup>4</sup>

### 〔第18章「自由人」〕

コスターは、第18章においてブラジルの自由人を次のように分類している。

- (a) ヨーロッパ人
- (b) ブラジル人（ブラジル生まれの白人）
- (c) ムラート（白人と黒人との多様な混血、）
- (d) ママルーコ(mamaluco)（白人と先住民との多様な混血）
- (e) インディオ〔カボクロ〕（植民地社会内の教化された先住民）
- (f) インディオ〔タブヤ〕（未開の先住民）
- (g) 奴隷身分から解放されたブラジル生まれの黒人やアフリカ生まれの黒人
- (h) メスティソ（先住民と黒人との混血）

この他、奴隷として、アフリカ生まれの黒人、クレオール（ブラジル生まれの黒人）、ムラート（白人と黒人の混血）、メスティソ（先住民と黒人との混血）を挙げている。<sup>5</sup>

コスターは、ブラジルにおいて多様な混血が生じた理由として、人口上の

理由を挙げ、次のように説明している。

ポルトガルは、人口が少なく、アメリカ大陸に渡ったのは、単身の冒険家と犯罪者のみであった。本国で生計の手段を得ようとした者は、本国で職が得られたので、植民地へ渡航する必要はなかった。政治的、あるいは宗教的な理由で渡航する必要もなかった。アメリカ大陸へ渡航した者の大半は、独身者で、ブラジルでは、先住民女性、あるいは黒人女性と交わった。そのような慣習が長く続き、それを制限する法も制定されなかったので、先住民や黒人の女性と交わることに對して、それが退化(degradation)であるとの考えはブラジルでは消え去った。<sup>6</sup>

このように、コスターは、ブラジルにおける多様な人種の存在は、本国の意図的な政策によるものではなく、ポルトガルの人口が少なかったことから生じた自然発生的なものとして捉えている。

第 18 章には、ブラジルにおける 19 世紀初頭の人種関係に言及した部分があり、次の点が重要である。すなわち、ブラジルでも、ヨーロッパ人（白人）が優越しているとの考えは完全にはなくならなかったし、有色人は、法令上、また建前上は、官吏や聖職者にはなれなかった。しかしながら、実態としては、そのような法律上、建前上の制約は、巧みに回避され、混血者にも、官吏や聖職者への道は開かれていた。<sup>7</sup>

ブラジルの混血人口の中で最も多数を占めたムラート（白人と黒人との混血）の自由人は、コスターによると、自分たちはママルーコ（白人と先住民との混血）よりも優越していると考え、先住民と交わっていないことを誇りに思っていた。ただ、自分たちが、いまだに奴隷である者たちと繋がりがああり、自分と同じ膚の色をした多くの者が奴隷であることを意識していたので、白人が富裕で、力をもつ場合には、白人といっしょにいるときは、いつも劣等感をもっていた。下層の白人が、富裕な白人に対してそれほど劣等感をもたないのと比べるとその点、差違があった。ただし、コスターによると、「ムラートが感じる劣等感」は、膚の色によるものというよりは、貧困から生じる劣等感」であった。「というのは、自分と同じ膚の色の者が幸運にも富裕にな

ったときにも、彼らは、同じように尊敬の念」を示したからである。<sup>8</sup>

このように説明した上で、コスターは、ブライアン・エドワーズの『西インド諸島の歴史』（1793）を参考文献として挙げながら、「英領の植民地における有色人の劣悪な状況は、嘆かわしい」と短いコメントを加えた。<sup>9</sup>

その上で、コスターは、ブラジルにおいては、ムラートに対する軽微な規制さえも、実際に適用されることはない、と述べ、聖職位への叙階や行政官・司法官への任命は、書類上、その人物が白人となっていれば、外見が明白に異なっているにもかかわらず、問題なく行われると指摘し、一つの実例を挙げている。

「ある時、私のもとで仕事をしていた膚の色の黒い男に、軍の地方司令官がムラートだと思わないかと尋ねた。その男は答えた。『昔はそうだったけれども、今は違う。』私が、どういうことか説明してくれるように頼むと、『だって、軍の地方司令官がムラートであるはずがないでしょう？』と答えた。」社会的な地位が人種の区分を変えるというのである。<sup>10</sup>

さらに、コスターは、親しい聖職者が、その膚の色や髪の毛から見て、出自が明確にムラートである例を挙げている。<sup>11</sup>

## 〔第19章「奴隷制」〕

前稿において、コスターがブラジルの奴隷制の特徴として考えているものをいくつか指摘した。

### (a) 「奴隷の奴隷身分からの私的な解放」(Manumission=Alforria)

(当時のブラジル社会では、慣行上、奴隷の金銭の所持がおおむね認められていた。そのため、奴隷は自身の購入価格、あるいは時価を支払うことで、金銭による「奴隷身分からの私的な解放」の恩恵を得る可能性が存在した。このような可能性は、「奴隷の畑」の存在や都市部での「ガニョ奴隷制」と相まって、ブラジル奴隷制社会が「温和」であるとの印象を与える大きな役割を果たした。)

### (b) 「奴隷の畑」の存在

(「奴隷の畑」での収穫物は、奴隷のものとなり、余剰は売却することもあ

った。それは、奴隷の「収入源」となった。日曜日・祝祭日の「遵守」は、「奴隷の畑」での耕作時間を確保する上でも重要であった。）

(c)都市部での「ガニョ奴隷制」

（奴隷が主人のもとを離れて仕事を求めて街路に出て、手間賃を稼ぎ、その稼ぎの一定割合を主人に渡し、残りは自分のものとした。）

(d) 奴隷の「結婚」の許可や宗教心の高揚

（宗教心の高揚は、奴隷の統制手段としても重視された。）

このように、コスターが第 19 章「奴隷制」で挙げるブラジル奴隷制社会の特徴は、奴隷たちが、自分自身の努力で奴隷身分から解放されるという望みを持っていたという点など、アンティール諸島の奴隷の待遇と比べると、奴隷にとってずっと有利なものであるという印象を与えるものであった。<sup>12</sup>

第 18 章「自由人」と第 19 章「奴隷制」の記述を合わせると、コスターが描く 19 世紀初頭のブラジル社会の特徴は、次のようなものとなる。

- (a) 人口が少なかったポルトガルからは、植民者は、単身で渡来し、現地で先住民・黒人の女性と交わった。
- (b) その結果、ブラジルでは、多人種社会が誕生した。
- (c) ブラジルでも、白人が建前上、行政官・司法官、あるいは聖職者として、優越した社会的地位を占めている。
- (d) ただし、人種の区別は比較的寛容であり、実際上は、人種を理由とする規制はきわめて緩やかである。
- (e) 奴隷制に関しては、ブラジルでは、金銭によるものを含め、「奴隷身分からの私的な解放」が行われている。
- (f) ブラジルでは、「奴隷の畑」、「ガニョ奴隷制」など、奴隷に有利な慣行が見られる。
- (g) ブラジルでは、奴隷主は、(カトリックの儀礼に従う) 奴隷の結婚を奨励している。
- (h) 日曜日や宗教上の祝日は、奴隷にとっても休息日であった。

## 2. コスターのブラジル奴隷制社会像の背景

このように、コスターのブラジル奴隷制社会像は、全体として「奴隷制社会」の寛大さ、寛容さを強調したものとなっている。そこから、前稿で引用した第19章「奴隷制」の冒頭にある記述が導き出されることになる。

南米のポルトガル領において有色自由人に関する法律に一般に広く見られる公正さは、奴隷状態にある人々にもある程度拡大して適用されてきた。それでブラジルの奴隷の境遇は、他の国々の支配下で喜びのない生活を送るみじめな人々の境遇ほどは、厳しいものでも、耐えがたいものでもない。ブラジルの奴隷は、奴隷主が信仰する宗教の教えを受けているし、またかれらは自分自身の努力で奴隷身分から解放されるという望みを持っている。(中略)

ブラジルの奴隷はイギリス領植民地のかれらの同胞に比べて恵まれた立場にある。<sup>13</sup>

ここで問題となるのは、コスターの『旅行記』の章立てである。『旅行記』は、21章で構成されているが、第13章までが年代順にコスター自身の旅行を記述したもので、第14章から第17章までは、ブラジルの動植物や農業に関する記述である。ところが、第18章以降は、第18章「自由人」、第19章「奴隷制」、第20章「人道に反する奴隷貿易」、第21章「1810年2月19日リオデジャネイロで署名されたグレートブリテン王国とポルトガル王国との間の友好同盟条約・通商航海条約」という項目が並んでいる。<sup>14</sup>ダ・クニャによると、『旅行記』の第18章―第21章は、コスターが『旅行記』の刊行と同じ年1816年に発表した論考『いかに奴隷制を改善するかについて』(On the amelioration of slavery)と関連があり、本来はその一部を構成するために執筆された可能性が高いという。<sup>15</sup>

『いかに奴隷制を改善するかについて』と題された論考は、『ザ・パンフレティア』(*The Pamphleteer*) 誌 (vol. VIII., no. XVI, 1816, pp. 306-336) に掲載されたもので、その中で、コスターは、カリブ海域の英領における「奴隷制から

自由労働への移行」の必要性を訴え、道徳的な理由だけでなく、政治的な理由からも、そのような方向で社会的な混乱を避ける必要があるとし、そのためには、奴隷に自由労働や貯蓄について教え、土地との結びつきをもたせ、自由で、有能な有色人を増やすことを奨励すべきであり、そのことが社会の平穏と安全の鍵である、と論じている。つまり、「奴隷にいくぶんかの土地の実質上の用益権を与え、土地との絆を持たせ、奴隷に金銭の所有を認めることで、金銭の支払いによる奴隷の私的な解放を認め、さらには、奴隷に対して、道徳的、宗教的な教育を必須とすることを勧めているのである。」<sup>16</sup>ダ・クニャによると、このような主張は、当時の奴隷制・奴隷貿易廃止論者の主張と軌を一にしている。<sup>17</sup>

このように見てくると、『旅行記』の第18章および第19章の記述を考察する際には、上述のようなコスターの主張がその背景にあることを考慮する必要がある。つまり、コスターは、『旅行記』、特に第18章以降では、単にブラジル奴隷制の特徴を記載したのではなく、自らの主張を論証する論拠として、ブラジルの奴隷制社会の実態を取り上げた可能性が高いからである。

ダ・クニャは、「新しい研究は、コスターの結論のいくつかが正しいかどうかについて、問題を提起している」<sup>18</sup>とし、一例として、シュウォーツの論考<sup>19</sup>を挙げている。もっとも、シュウォーツがその論文で述べているのは、「19世紀初頭の旅行者たちは、ベネディクト修道会の農園を好意的に評価した。ペルナンブーコで『砂糖農園(engenho)』を経営したイギリス人で、ベネディクト修道会のジャグアリベ農園(fazenda)を何度も間近に見たヘンリー・コスターは、その経営方針や成果をひたすら賞賛した。しかし、これは、これらの農園の経営がいつも順調で、そこには他の農園を悩ます問題や誤りがなかったということを意味していたわけではなかった。(…)」<sup>20</sup>という点だけであり、ダ・クニャが言うほどコスターの記述に疑問を呈しているわけではない。しかし、いずれにせよ、シュウォーツもコスターの『旅行記』に見られる過度に楽観的で、牧歌的な内容に一定の保留が必要なことを示唆しているのは事実である。

確かに、ペルナンブーコ地方ジャグアリベのベネディクト派修道院が経営する砂糖農園やその他の記述に見られる牧歌的な描写には、それが他の奴隷制社会のモデル（例えば、カリブ海域の英領植民地のモデル）となるかのような記述があり、史料として用いる際には、コスターの政治的な立場を念頭に置く必要があるといえる。

ほとんどすべての労働は、請負仕事制で行われている。そして、仕事は、通例、午後3時には終了する。そのため、勤勉な者であれば、毎日、自分の畑で働くことができるのである。奴隷たちは、日曜日や祝祭日のほか、彼ら自身の食料を得るため、毎週土曜日を利用することができる。勤勉な者であれば、自分の自由を買い取ることができない者はほとんどいない。<sup>21</sup>

黒人（奴隷）は、主人から食物を与えられるが、土地は豊富にあるので、奴隷たちは自分たちが適切であると思うものを何でも植えることが許されていて、収穫物は、彼が好む人に誰にでも売却することができる。奴隷の多くは、豚や家禽を飼育しており、時には、馬を飼育している者もいる。その馬を貸すと、金銭を得ることができる。<sup>22</sup>

上述のような、コスターとイギリスの奴隷制・奴隷貿易廃止論者との関係を考慮すると、コスターの奴隷制に関する論考には、『旅行記』の当該部分を含めて、一定の「ゆがみ」がある可能性がある。<sup>23</sup>

本稿の冒頭で述べたように、コスターの著作は、「正確なコスター」との評を得て、ブラジルに関する基本書の地位を占めた。そのため、本稿で述べたような、コスターの『旅行記』が描くブラジル奴隷制社会は、当時の奴隷制・奴隷貿易廃止運動に一定の影響を及ぼしただけでなく、ブラジルの奴隷制が「寛容」であったというある種の「神話」の起源となり、「タネンバウムの著書から始まり、長い歴史を有する南北アメリカ奴隷制の比較研究へと繋がった」<sup>24</sup>可能性がある。この点に関しては、コスター著『いかに奴隷制を改善するかについて』に関するさらなる考察とともに、今後の課題としたい。

<sup>1</sup> 本段落に関しては、拙稿「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816年)について(1)―人と作品―」、『ブラジル研究』第8号(大阪大学世界言語研究センター、2012年)、pp. 51-60、および「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816年)について(2)―ブラジルの奴隷制社会―」、『ブラジル研究』第9号、(大阪大学外国語学部ブラジル研究会、2013年)、pp. 15-26を参照。

イギリスの探検家・著述家リチャード・フランシス・バー-tonは、コスターを"the accurate Koster (1809-1815) settled in trade at Pernambuco" と評した。

Richard Francis Burton, 1869, *Explorations of The Highlands of Brazil*. two volumes, London: Tinsley Brothers, vol. 1, p. 3. (archive.org > eBooks and Texts > Brown University 参照)

<sup>2</sup> Manuela Carneiro da Cunha, 1990, " 'On The Amelioration of Slavery' by Henry Koster", *Slavery & Abolition: A Journal of Slave and Post-Slave Studies*, vol. 11, No. 3, pp. 368-398.

<sup>3</sup> Francis A. Dutra, 1980, *A Guide to the History of Brazil, 1500-1822, The Literature in English*, Santa Barbara: ABC-Clio, p.39.

<sup>4</sup> Maria Lúcia de Suoza Rangel Ricci, "Koster, Henry", in Maria Beatriz Nizza da Silva (coordenação de), 1994, *Dicionário da História da Colonização Portuguesa no Brasil*, Lisboa, p. 468.

<sup>5</sup> Henry Koster, 1816, *Travels in Brazil*, London, [British Library Historical Print Collections (History of Travel Collection) 9781241502300], pp. 386-387.

<sup>6</sup> Koster, *op.cit.*, pp. 384-385.

<sup>7</sup> Koster, *op.cit.*, p. 385, p. 391.

<sup>8</sup> Koster, *op.cit.*, pp. 390-391.

<sup>9</sup> Koster, *op.cit.*, p.391; Olwyn M. Blouet, *Bryan Edwards, F.R.S., 1743-1800*, Notes Rec. R. Soc. Lond. 54 (2), 215-222 (2000).

<sup>10</sup> Koster, *op.cit.*, p. 391.

<sup>11</sup> Koster, *op.cit.*, p. 391.

<sup>12</sup> 詳しくは、拙稿 (2013) 「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816年)について(2)―ブラジルの奴隷制社会―」、pp. 15-26を参照。なお、丸括弧内は、本稿の筆者による注記。

<sup>13</sup> Henry Koster, *Travels in Brazil*, (London, 1816), pp. 402-403; Henry Koster, *Travels in Brazil*, (London, 2nd ed, 1817), Vol.II, pp. 227-229; (拙訳)、歴史研究会編『世界史史料 南北アメリカ - 先住民の世界から一九世紀まで』(岩波書店、2008年)、p. 285 所収。

<sup>14</sup> 拙稿 (2012) 「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816年)について(1)―人と作品―」 pp. 56-57。

<sup>15</sup> Da Cunha, *art. cit.*, p. 369.

<sup>16</sup> Da Cunha, *art. cit.*, p. 369、コスターの論考の要旨は、ダ・クニャによる。原文は、

"On the amelioration of slavery" (London: *The Pamphleteer*. vol. VIII. , no. XVI, 1816, pp. 306-336. ) Reprints from the collection of the University of Michigan Library MOD1002738901.

<sup>17</sup> Da Cunha, *art. cit.* , pp. 370-373.

<sup>18</sup> Da Cunha, *art. cit.* , p. 368.

つまりダ・クニャは、コスターが奴隷制・奴隷貿易廃止論者からの影響で、実態を誇張して描写している可能性を問題としている。

<sup>19</sup> Stuart Schwartz (1982), "The Plantation of St. Benedictine Sugar Mills of Colonial Brazil", *The Americas*, vol. 39, No. 1, pp. 1-22.

<sup>20</sup> Schwartz, *art.cit.*, p. 17.

<sup>21</sup> Koster, *op.cit.*, pp. 425-426.

<sup>22</sup> Koster, *op.cit.*, pp. 432-433.

<sup>23</sup> Da Cunha, *art. cit.* , p. 369.

<sup>24</sup> Da Cunha, *art. cit.* , p. 368.

## 参考文献

東明彦「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816年)について(1)ー人と作品ー」、  
『ブラジル研究』第8号(大阪大学世界言語研究センターブラジル研究会、  
2012年)、pp. 51-60。

——「ヘンリー・コスター『ブラジル旅行記』(1816年)について(2)ーブラジルの  
奴隷制社会ー」、『ブラジル研究』第9号、(大阪大学外国語学部ブラジル研  
究会、2013年)、pp. 15-26。

——「153 ブラジル北東部の砂糖農園(十九世紀初め) ヘンリー・コスター『ブ  
ラジル旅行記』(一八一七年)」、歴史研究会編『世界史史料 南北アメリカ  
先住民の世界から一九世紀まで』(岩波書店、2008年) pp. 284-286。

Burton, Richard Francis, 1869, *Explorations of The Highlands of Brazil*. two volumes, London:  
Tinsley Brothers, vol. 1, p. 3. (archive.org > eBooks and Texts > Brown University)

Cunha, Manuela Carneiro da, 1990, " 'On The Amelioration of Slavery' by Henry Koster",  
*Slavery & Abolition: A Journal of Slave and Post-Slave Studies*, vol. 11, No. 3, pp.  
368-398.

Dutra, Francis A., 1980, *A Guide to the History of Brazil, 1500-1822, The Literature in English*,

---

Santa Barbara: ABC-Clio.

Koster, Henry, 1816, *Travels in Brazil*, (London), British Library Historical Print

Collections (History of Travel Collection) 9781241502300.

——— 1816, "On the amelioration of slavery" (London: *The Pamphleteer*: vol. VIII. , no.

XVI, 1816, pp. 06-336. ) Reprints from the collection of the University of Michigan Library MOD1002738901.

——— 1817, *Travels in Brazil*, (London), British Library Historical Print

Collections (History of Travel Collection) 9781241439262.

——— 1942, (Tradução e Notas de Luiz da Camara Cascudo), *Viagens ao Nordeste do Brasil*

"*Travels in Brazil*", "Brasiliana" Biblioteca Pedagógica Brasileira, Série 5.a Vol. 221, São Paulo.

Ricci, Maria Lúcia de Svoza Rangel, 1994, Koster, Henry, in Silva, Maria Beatriz Nizza da

(coordenação de), *Dicionário da História da Colonização Portuguesa no Brasil*, Lisboa.

Schwartz, Stuart, 1982, "The Plantation of St. Benedictine Sugar Mills of Colonial Brazil",

*The Americas*, vol. 39, No. 1, pp. 1-22.